

『万葉集』から見る 日本の古典

20
獨協大学特任教授 城崎 陽子

近江遷都

— その 1 —

先回は百済滅亡に伴う歴史的背景やその援軍に向かった斉明天皇の「征西」にまつわる歌や伝承、「征西」の途次に中大兄皇子が詠んだとされる大和三山妻争い伝説の歌を扱った。今回は「征西」の戦後処理として、最も大きな出来事である近江遷都を扱い、三輪山伝説などをみてみたい。

白村江で大敗を喫した中大兄皇子は、その執政に対する不満の声を抑えて天智天皇六年(六八七)三月、都を飛鳥から近江(滋賀県)に遷した。この近江遷都の理由については、先回も少し触れた通りさまざまに推論されているが、外的な側面と内的な側面から考えてみる必要がある。外的な

側面としては、唐・新羅の襲撃に備えてのことというのがまず考えられる。白村江の大敗後、ただちに對馬・筑紫に防人を配置し、また烽(のろし台)を設置している。筑紫に水城(防備用の土塁)が築かれたのもこのときである。外敵対策にいかにかがよくなる。

是の歳に、對馬島、志岐島、筑紫国等に防と烽とを置く。又、筑紫に、大堤を築き水を貯へ、名けて水城と曰ふ。
〔日本書紀〕
天智天皇三年是歲条 一方、内的な側面としてはすでに述べたように皇太子時代に多くの人の命が奪われた。蘇我入

鹿をはじめ、異母兄の古人大兄皇子、従兄弟の有間皇子、孝徳天皇の憤死も間接的ではあるが中大兄皇子が関与していた。そうした人々の怨霊への不安や悲劇に対して、同情を寄せる反対派の厳しい眼もあつたにちがいない。民衆は遷都を願わず、連日連夜のように放火があつたという。こうした情勢の中、いわば「明日香の呪縛」からの脱出という点も考慮に入れておく必要がある。

六年(中略)三月の辛酉の朔にして己卯(十九日)に、都を近江に遷す。是の時に、天下の百姓、遷都すことを願はずして、諷諫む者多く、童謡亦衆し。日々夜々失火の処多し。
〔日本書紀〕
天智天皇六年三月条 さて、民衆が遷都を厭うなか、近江遷都は強行された。『万葉集』には、

その際に額田王が詠ったとされる歌が残る。
額田王、近江国に下る時に作る歌、井戸王の即ち和ふる歌
味酒三輪の山あをによし 奈良の山の隙に隠るまで道に限り積もるまでにつばらにも見つづけるをしばしも見放けむ山を心なく雲の隠さふべしや
(巻一・一七番歌)
反歌
三輪山を然も隠すか雲だにも心あらな

も隠さふべしや
(巻一・一八番歌)
右の二首の歌は、山上憶良大夫の類聚歌林に曰く、「都を近江国に遷す時に、三輪山を御覽す御歌なり」といふ。日本書紀に曰く、「六年丙寅の春三月、辛酉の朔の己卯に、都を近江に遷す」といふ。
綜麻かたの林の前のさ野榛の衣に付くなす目に付く我が背
(巻一・一九番歌)
右の一首の歌は、今



大津宮正殿跡

案ふるに、和ふる歌に似ず。ただし、旧本にこの次に載せたり。故以に猶し載せたり。

飛鳥から近江へは、北上する道をたどって進む。その途中の右手に三輪山が見える。その三輪山「山の際に隠るまで道の隈に積るまでに(三輪山が奈良の山の山の際に隠れるまで)」また、「つばらにも見つづけるをしばしも見見る放けむ山を(しみじみと見つづけるこのものを、幾度も望みつつ行こう山を)」と、言い換え、繰り返ししながら「見る」ことに固執する当該歌は、近江へ下る人々の三輪山への惜別の情が代表されているといえよう。さらに、第一の反歌では今も雲に隠れそうなる三輪山を見て「雲だにも心あらなも隠さふべしや(雲だだけでも心あつて欲しい、隠すべきではない)」と嘆願に近い心情が述べられているのである。三輪山は現在も山を御

神体とする大和を代表する山である。第二の反歌に「綜麻かた」とあるように、流麗な円錐形の山容をもつ。では、なぜこの山をこまで「見たい」と詠うのか。そこには三輪山にまつわる伝承が関わっていると思われるのである。この山には、次のような伝承が残されている。

此の天皇の御世に、役病多た起りて、人民尽きむと為き。爾くして、天皇の愁へ歎きて神床に坐し夜に、大物主大神、御夢に顕れて曰ひし、是は我が御心ぞ。故、意富多々泥古を以て、神の氣、起らず、国も亦、安らけく平らけくあらむ」といひき。是を以て、驅使を四方に班ちて、意富多々泥古と謂ふ人を求めし時に、河内の美努村に、其の人を見得て、貢進りき。爾くして、天皇の問ひ賜はく、「汝は誰が子ぞ」ととひたま

ふに、答へて白しく、「僕は、大物主大神の、陶津耳命の女、活玉依毘売を娶りて、生みし子、名は櫛御方命の子、飯肩葉見命の子、建甕槌命の子にして、僕は、意富多々泥古ぞ」と、白しき。是に、天皇、大きに歎びて詔はく、「天の下平き、人民栄む」とのりたまひて、即ち意富多々泥古命を以て、神主と為て、御諸山にして、意富美和之大神の前を拜み祭りき。
〔古事記〕 崇神天皇条 崇神天皇の時、疫病が流行し、多くの人民が死んだ。天皇が夢託(夢による託宣)を行つたところ、夢に現われた大物主大神によつて、その災厄が大なることを知らされる。そこで、天皇は神託に従つて大神の子孫である意富多々泥古に「御諸山(三輪山)の大神を祀らせ、この国の平安を取り戻し」といふのである。

高尾山の昆虫

アオヤンマ

106

日本を「秋津島」と呼ぶことがあり、これは「トンボの国」という意味で、トンボは日本を代表する虫といえます。
幼少の頃トンボ少年であつた私は特に大型のヤンマの仲間が好きで、オニヤンマ、ギンヤンマらに出会うことはできましたが、最美麗種とされるマルタヤンマとアオヤンマには憧れたものです。
高尾山の麓を流れる清流はトンボの宝庫で、ここでは多数のトンボやヤンマが見られます。通常のヤンマは腹部の第三節がくびれているのが特徴ですが、アオヤンマは寸胴で飛んでいても直ぐに分ります。
アオヤンマの名にあさわしく雌雄共に美しい青緑色をしていて、オスの方がより青味がより強いですが、結構活発に飛び、よく止っている葦の中でも見つけて生態写真を撮るのはなかなか難しいですが、小中学生くらいの男の子たちが短い竿且つ口径の狭い網で実際に器用に捕まえているのを見て驚きました。大人はそうはいかず、トンボ採りはやはりトンボ少年に限ると改めて感じる次第です。
(撮影・文松島 孝)

